

生活支援を助け合い活動で行うには、 どうすればよいか

提 言

助け合い活動のできる生活支援はたくさんあります。
つながる気持ちを大切に、
家族や知り合いにやれるような支援を、
近くで困っている人にも広げていこう。
そうすれば自分が暮らすまちがもっとあたたかく、
楽しく、住みやすい地域になります。

登壇者

【進行役】	清水 肇子	(公財) さわやか福祉財団理事長
【アドバイザー】	松岡 洋子氏	東京家政大学人文学部教授
	澤出 桃姫子氏	日常生活支援 あつべつ・たすけ愛ふくろう代表
	清水 孝子氏	各務原市八木山地区社会福祉協議会事務局担当
	谷 仙一郎氏	(特非) 元気な仲間代表理事
	西元 和代氏	地域の応援隊 和 事務局長

■ 寄せられた声から

- 実践されている方のお話は涙が自然に流れるくらい感動しております。今、まだ企業人ですが、卒業後、いや明日からボランティア活動をしようと思います。
- 熱意ある住民はいると思いますが、きっかけのない人がいるのではないかと思います。勇気ある決断の末、とても充実した人生を送っておられ、うらやましくも感じます。得たものがたくさんありました。
- 続けること、巻き込むこと、笑顔、楽しく、仲間とともにというキーワードを勉強させていただきました。

議事要旨 清水 肇子

助け合い活動の中では比較的重たい、継続的な関わりが必要な生活支援は、実践が難しいと思われがちで、その広がりはまだまだ少ない。しかし、実際に活動している現場では、“生活支援まで助け合いのできる”ことは当たり前的前提として、本人に寄り添った支援がとても細やかに、そして楽しそうに展開されている。目指す地域共生社会は住民主体でつくるもの。生活を支え合う仕組みを、いきがい・助け合いとどうつなぎながら広げていくのか。いわばサミットで問いかける一番基本のテーマであり、大阪サミットに続く分科会として行った。

- 生活支援は技術が必要なプロだけの領域ではない。助け合いで行える生活支援は多様にある。
- 逆にプロのサービスでは難しい支援やアプローチなど、助け合い活動だからこそ実践できることがあり、本人及び支援者双方に大きな効果が生まれている。

4人の活動者の実践は、まさにこうした点がそのまま自然に行われているのだと改めて実感させてくれた。

「ささえあいの家を整備したことで、活動を飛躍的に発展させることができた」と清水孝子さんは言う。介護している夫がベッドから落ちた。助けて！と、そんな緊急の依頼にも対応する何でも相談・駆け込み寺の役割を果たす。民間の介護事業者も撤退した中山間地で活動している西元和代さんは、高齢者はじめ子育て中の人も働く人もみんなで、と呼びかけ、利用者さんも運転ができるとわかれば「骨折している人の買い物できん？」と、支える側としての出番もつくる。介護事業と助け合いの両方の生活支援を行っている谷仙一郎さんは、包括の依頼で地域から孤立していた高齢者宅に助け合いの生活支援で初めて入り、「ありがとう」と言ってもらえるまでに助け合いで心の扉を開いた。地域力が何より大切と介護

事業にも参入しながら助け合い活動の普及を20年以上実践してきた澤出桃姫子さんは、行政や包括も含めた多様なネットワークの重要性を伝え、助け合いの仕組みをつくった後の「育てる協議体も必要」だと強調した。確かに発表者の皆さんは生活支援の活動を、狭い福祉分野の枠で捉えず地域とつながる関係をしっかり構築し、それが継続と発展の源になっている。清水孝子さんは特に包括との情報共有の大切さを自身の事例から指摘した。

アドバイザーの松岡洋子さんは、介護保険サービスと助け合いの生活支援は視点がまったく異なるという点を踏まえてわかりやすくポイントをまとめた。難病を患った人が助け合いの生活支援を受けて、“自分らしさのないセピア色と思った人生に色がついていくことがわかり希望が湧いた”という言葉（澤出さんの事例）がまさにシンボリックだと伝え、助け合いの生活支援は、単なるサービス提供を超えて地域でのつながりをつくっていること、そして利用者と活動者それぞれの人生に彩りを添え、いきがいと充実感を与えているという点を確認した。

もちろん皆、壁や課題にぶつかる。けれども課題こそが次へのエネルギーだと逃げずに皆で困り事に目を向け、異論も含めてじっくり話し合い、具体的な取り組みにつなげている。その原点は、困っている人への共感、自分が住んでいる地域への愛着、そこから生まれる交流の楽しさだ。登壇者の事例は様々なヒントを与えてくれたが、助け合いの生活支援は単なる一方的な「担い手」づくりではない。大切なのは、つながりを深め、自分たちで情報を集め、都度考えながらやってみる、というその姿勢なのだということを併せて忘れずに学びたい。

助け合いの生活支援は多様多彩。誰でもできるそのあたたかな一助が全国に広がることを願って提言とした。

アンケートの結果 参加者概数：273名 回答者数：82名

